

研究ノート

生活環境におけるパブリック・アートの意味

池田 晶一

日本福祉大学 情報社会科学部

A meaning of public art in life environment

Shoichi Ikeda

Faculty of Social and Information Sciences, Nihon Fukushi University

Keywords: パブリック・アート, 環境, 彫刻, 現代美術, 公共空間

1. はじめに

昨今、まちづくりや街の景観に関わるものとして、生活環境の中に置かれる彫刻などの芸術作品が多く存在するようになった。

一般に街中の彫刻というと、東京の渋谷で有名な忠犬八子公や、歴史上の著名な人物（西郷隆盛や坂本竜馬等）をモチーフにした具象彫刻を頭に描く人が多い。しかしながら、現在では様々な彫刻・造形物を目にする事ができる。

これらの造形物の発端は定かではないが、駅前広場や公園、公共建築物の敷地内、また史跡の中に記念碑やモニュメントとして設置されてきたものが多いと思われる。

現在では、街角彫刻展やパブリック・アートによる街づくり、如いては現代美術という既成の形を超えたものまでが、これらパブリック・アートの舞台に上がっている。それらの造形作品を見ると、先に挙げた具象的な彫刻等がその空間に対して作り出す意味とは違ったものを見つけることが多い。様々なアーティストが実験的な試みも含め多様な提案をしている。

パブリック・アートの芸術的な評価を客観的に行うことは、それを見る人の嗜好に左右されるところが大きく難しい。しかし、ここでは生活環境の中でパブリック・アートの持つ意味を考え、これらの造形物を整理し、これからのパブリック・アートが担うべき役割

を見てゆきたい。生活環境に関しての様々な事柄がある中で、パブリック・アートの意味を精査してゆくことは、生活環境にとって大きな意味を与えるものと考えられる。

2. パブリック・アートの流れ

街の中にアート作品が多くなってきたことは先にも述べたが、ビルの入り口付近の彫刻や路上の造形物、風景と一体化して新たな景観を作り出す造形物...多様な形態の環境芸術作品が私たちの生活を取り囲み始めている。

これは、芸術やアートにかかわる者たちが、芸術作品を、美術館やギャラリーの中だけのものではなく街の中に広めてゆこうという大きな流れの中で培われているものでもある。

西欧においては、石積みの建築物に古くから建築装飾として石の彫刻や焼き物製のテラコッタと呼ばれる彫刻物が付加されており、パブリック・アートの概念は早くから持ち合わされていた。日本においては、木造中心の家屋であり、建物本体に大きな石の彫刻物を取り付けることはあまり考えられない。しかし明治以降、石やコンクリート製の建物が一般に広がるにつれ、テラコッタ等の装飾物も広まるようになって来た。ところが、路上等に設置されるような環境になったのはまだ近年ことであり、街並みや都市計画の中でのその

意味は、これから高めてゆくべき課題である。また同時にこれらの造形物が担う地域の空間に占める意味も大きなものになると考えられる。

3. 研究の進め方

本研究では、まずパブリック・アートの分類を行う。

そして、調査をした地域それぞれの造形物を分類別に集計し、パブリック・アートが環境に与える意味を考える。

また考察の後、こらからの生活環境の中におけるパブリック・アートの目指すべき方向を考えたい。

4. パブリック・アートの分類

パブリック・アート作品そのものの形態は千差万別であるが、その持ち合わせている意味を2つの方向(設置状態、生活者との距離・関わり方)から考え分類する。

・パブリック・アートの分類

設置状態から見た分類

- A. 独立型...空間の中で造形物が独立して存在するもの。
- B. 寄生・共生型...造形物が建造物の壁面などに設置されているもの。
- C. 建造物一体型...造形物が建造物の一部として一体化したもの。

生活者との距離・関わり方からの分類

- a. 使用・参加型...ベンチや椅子などの人が直接触れ、使用したり参加したりできるもの。
- b. 機能型...車止めなどの機能を有するもの。
- c. 景観型...造形物が景観に積極的に関与する場合

や、造形物の大きさや色彩によりビュー・ポイント(空間における視点)として視覚的機能を有しているもの。

d. オブジェクト型...景観や置かれる場や環境に関係なく造形物単独で存在するもの。

生活者との距離、関わり方からの分類には、それぞれ使用・参加型、機能型、景観型を見ることができる。

また、設置状態から見た3つの分類に関しては、単純にその物の設置状態を見たもので、分類分けは難しいものではない。そして2つの分類の相互関係を表1のように位置づけることができる。

生活者との距離、関わり方からの分類については、使用・参加型は直接人が触れる意味をもち、人との距離・関係においては密接な意味を持つ。機能型は、日常的に直接触れる機会は少ないものの、道具としての意味を持ち間接的に人との関わりを持つものとなる。景観型は人の視点に関わり、空間の中で視覚的な意味をもたらす。オブジェクト型に関しては、人や環境における意味合いというよりも鑑賞物としての意味が濃い。

使用・参加型からオブジェクト型と見るにつれ、空間における人と造形物の関係が薄らぐ傾向を見ることができる。

生活者との距離、関わり方において見ておかななくてはならない事項がある。それは、造形物を4つの分類に分けたが、必ずしもそれぞれ1つの分類に分けることができない場合があることだ。2つの意味を持つものや、そのものが別の場所に設置された場合別の分類に属するものも出てくるということである。例えば、機能型の造形物であっても、それが景観の中で大きく意味を持ちうることもある。また、オブジェクト型であったとしても置かれる場所や環境により、景観型に分類されることもある。

この問題に関しては、実際の現地調査を基に、空間の中でどのように配置されているかが重要な要素となる。以下について述べる個々のサンプルは、現地調査を踏まえて、実際の空間の中での役割を見て特性を判断した。

5. パブリック・アートの調査

パブリック・アートの分類を踏まえた上でアートによる地域づくりの事例を見ていく。

今回、「ファーレ立川」・「新宿アイランドシティ」・

表1 パブリック・アートの分類表

			生活者との距離, 関わり方			
			a	b	c	d
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型
設置状態	A	独立型	使用・参加 /独立型	機能 /独立型	景観 /独立型	オブジェクト /独立型
	B	寄生・共生型	使用・参加 /寄生・共生型	機能 /寄生・共生型	景観 /寄生・共生型	オブジェクト /寄生・共生型
	C	建造物一体型	使用・参加 /建造物一体型	機能 /建造物一体型	景観 /建造物一体型	オブジェクト /建造物一体型

「東京国際フォーラム」の3つの地域について現地調査を行った。

パブリック・アートが置かれている場所は数え切れない程あるが、街づくり等に積極的にアートを取り入れた事例として上記の他、仙台市「彫刻のある街づくり」事業・「夢メッセみやざき」・「東京都庁舎」・神戸市「須磨離宮公園現代彫刻展」・愛媛県瀬戸田町「せとだビエンナーレ」等がある。

「ファーレ立川」・「新宿アイランドシティ」・「東京国際フォーラム」の3つの地域においては、建築物などの計画段階からプロデューサーが中心となり、アートプロジェクトが深く関与し整備が行われた場所であり、今回の調査地域とした。

そして、日本福祉大学の半田キャンパスのある半田市も調査対象とし、半田市のパブリック・アートの現状と今後の展望を考えたい。

以下、各地区の概要と現地調査で感じたコメントを添える。

5.1 ファーレ立川

ファーレ立川は、米軍基地跡地 5.9ha である東京都立川市曙町2丁目8及び35～41番に1994年10月に「立川基地跡地関連地区第一種市街地再開発事業」として展開された新しい街である。ホテル・デパート・映画館・オフィスビル・道路に囲まれた11棟の建物からなる複合都市には、36カ国92人のアーティストによる表現がなされている。そのアートの形態はさまざまである。ここでは人が触れて使用する等、人が参加できるものや、景観に関わりを持つものが多く計画されている。しかしながら、現地ですべてこれらを見たときには、少なからず人との距離があったように感じた。作品が場所を印象付けている場所と、ただ置いてあるように見えてしまうと、場所によってバランスを欠いた印象を受ける。

また、この場所において気になったことは、非常に違法駐輪が多いことに加え、自転車の中に作品が埋もれてしまっている場所があったこと。また、駐輪禁止の立て看板が非常に多く、場所によっては作品に看板が固定されているような所もあった。このように見苦しさを感じる一面もある。これは、設置者の意図とその後の場のあり方にずれが生じていることと、場が固定化された後の周辺整備が十分でないことの表れでは

ないかと考える。

継続的な観察と、場の適応に合わせた修正を重ねることの難しさを感じた。

5.2 新宿アイランドシティ

新宿アイランドは住宅・都市整備公団による西新宿（敷地面積 約22,200m²）の再開発事業である。アートを建築のアーバンデザインの重要な要素として取り入れ、内外10名のアーティスト等の共同により建築とアートの一体化が図られたものである。1990年に計画が始まり1994年に作品が設置された。作品数は少ないが、都市計画や建築物との係わり合いをより考えながら整備され、バランスのよさを感じる。空間に関する意図が非常に感じられる場所である。また、一つ一つの作品を通していても、非常に印象深い風景を作り出している。

5.3 東京国際フォーラム

東京国際フォーラムは、東京都千代田区丸の内内に1997年に開館した。1993年より東京国際フォーラムアート計画基本計画が策定され、建築とのかかわりを考えられながら作品設置がされた場所である。ここでは建築物との関わりが大きい作品が多く、先の「ファーレ立川」・「新宿アイランドシティ」の2例とはいささか性質が異なる。しかし建築空間を一つの環境と考えた上で見てゆくと、そこに置かれているものに必然性を感じるものが幾つかある。

この事業の基本方針の中に、以下のような一節がある。

「建築との調和」

建築とアートワークは、双方の利点をそれぞれ生かしながら独自の特徴を発展させることが重要である。こうした視点から、建築のコンセプトや特徴を踏まえ、フォーラムの機能および空間の質的向上に寄与し、建築との調和を十分配慮したアートワーク整備を行う。

このようなことから、ここで扱われているものが、単に美術作品を集めたものでないことが分かる。この手法は、いわゆる街づくりや地域計画の中でも利用でき、街の空間の質に対しても大きな意味をもたらすものであると考える。

5.4 半田市のパブリック・アート

半田市においては、ほとんどが独立したオブジェクト型に分類される。このことから見ると、その場所が持つ特性や空間構成の上での意味合いが薄い様に感じられる。これはその場の計画段階から、設置される意味を明確にし、特色付ける必要がある。

オブジェクト型においても、その場をシンボリックに引き立てているものならば、造形物の意味はおのずと出てくる。しかし、そうでないならば単なる装飾としての造形物に他ならない。空間の意味と造形物の意味を考えより創造的な空間ともの関係を意図したいところである。場所に意味を作り出すということにおいて、今後吟味してゆくべきである。

6. パブリック・アートの集計

調査をもとにパブリック・アートの分類による集計を行った。表2.3.4.5.6 参照。

また、それぞれの場所における割合をグラフで表記した。グラフ1.2.3.4.5 参照。

そして、個々の分類における造形物の参考例を別に示しておく。表7 参照。

7. 考 察

集計から各々の場所の性格付けと、どのようなことを目的としてこれらが設置されているかが良く判る。全てがうまく機能しているとは思わないが、それぞれに特色が見て取れる。

ファール立川は他の場所には無い機能型が49.6%を占めている。車止めや換気口を作品として造形的に提示しているのが特徴である。これらを含めて街を美術館に見立てている趣がある。作品の配置と街の関係のバランスよければ、そこに日常来る人達、偶然訪れた人達に意外な発見をもたらすであろう。

新宿アイランドシティにおいては、景観型の造形物が83.3%を占め、空間をシンボリックに引き立てている。造形物の空間に与える意味が非常に明確でお互いに引き立てあっているように思う。一つ一つの作品を見てもそのスケールとクオリティーは非常に高い。LOVEの文字を切り抜いた作品は交差点の歩道上にあり、モニュメンタルなイメージを強烈にそこに示している。場の質を作品それぞれが高めている様子を伺える。また、場と作品の必然性を感じさせている。

東京国際フォーラムに関しては、オブジェクト型が81.5%で中心になる。建築物の中ということもあり、全体の景観にかかわるものとしての数は少ないが、階段の踊り場や壁面に場のクオリティーを高める作品が多く見られた。場との対話がきめ細くなくされており、心地よさを感じる場になっている。

それぞれの場所が三種三様に特色付けられている様子が見て取れる。

半田市に関しては、グラフ上で見るとオブジェクト型が73.3%を占め、東京国際フォーラムと似た作品比率であるが、実際上の意味には大きな違いがある。東京国際フォーラムは、作品の質がコーディネートされた上で、全体としての計画やストーリー性を持たせているが、半田市の場合は個々の場所別に設置されており、全体の計画というものが無い。ただ、半田市で造形物のあるスペースだけを見れば意図されたものも感じられる。しかし、街の空間の大きなコンセプトとしてパブリック・アートを位置づけることが出来れば、街の景観全体に対する提示からそれぞれの造形物に対する意図を作り出すこともできる。

8. まとめ

以上のように、パブリック・アートの調査を基にその現状と、そのものがもたらす意味を見てきた。

今回研究を進める中で、パブリック・アートの意味を空間の中で意図的に考えることで、出来上がってくる空間そのものが意味を持って現れることが見えてきた。それには、造形物が設置される個別の事項ではなく、それらが置かれる広い環境に対してのコンセプトを持つことが必要である。

コンセプトに関しては、大きく2つの方向付けができる。1つは、生活者が直接体験したり触れたりできる造形物を中心に配置すれば、その場が持つ意味も人の触れ合いを大切にしたものになる。

もう1つは、視覚的な視点で造形物そのものを風景の一部のように配置することで、その場の景観は変わってくる。また、意図的にビューポイントを設定することで景観に動きやリズム等を与えることが出来る。ただ、当然のことではあるが、造形物だけでなくその周辺環境に対しても同じような意図が必要になってくる。全体のコンセプトがある中で、個別の造形物に関して意味を見出す必要があるということだ。

最後に、今回の調査で「ファーレ立川」・「新宿アイランドシティ」・「東京国際フォーラム」の3箇所は、ある限定された地域での調査であった。一方「半田市」においては、市全体の中での造形物の観察であった。土台となるフィールドに違いがある。

今後、「半田市」というフィールドと同等のフィールドを調査対象として比較研究したい。まちというフィールドの中でパブリック・アートの意味を精査してゆきたいと考える。

謝 辞

この研究は、日本福祉大学課題研究費において進めたものである。ここに感謝の意を示しておきたい。また、本稿はその研究における環境造形物の一部を研究ノートとしてまとめたものである。環境造形物の範疇は非常に多岐に渡るため、今後個別のテーマごとにまとめてゆきたい。

参考文献

- 別冊太陽 パブリック・アートの世界．平凡社（1995）
SD別冊27パブリック・アートの現在形 新宿アイランド・アート計画，1995年7月号別冊．鹿島出版社（1995）
東京都生活文化局総務部国際フォーラム事業調整室編集．東京国際フォーラムのアート・コレクション．多様性の舟，130pp．東京ときめきフェスタ実行委員会発行，東京都（1996）

パブリックアートの地域別分類による作品数とその割合

表 2

ファーレ立川			生活者との距離，関わり方				小 計	割 合
			a	b	c	d		
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型		
設置状態	A	独立型	8	43	5	18	74	65.5
	B	寄生・共生型	1	11	11	11	34	30.1
	C	建造物一体型	0	2	3	0	5	4.4
小 計			9	56	19	29	113	100.0
割 合			8.0	49.6	16.8	25.7	100.0	

表 3

新宿アイランドシティ			生活者との距離，関わり方				小 計	割 合
			a	b	c	d		
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型		
設置状態	A	独立型	0	0	5	1	6	50.0
	B	寄生・共生型	0	0	3	0	3	25.0
	C	建造物一体型	0	0	2	1	3	25.0
小 計			0	0	10	2	12	100.0
割 合			0.0	0.0	83.3	16.7	100.0	

表 4

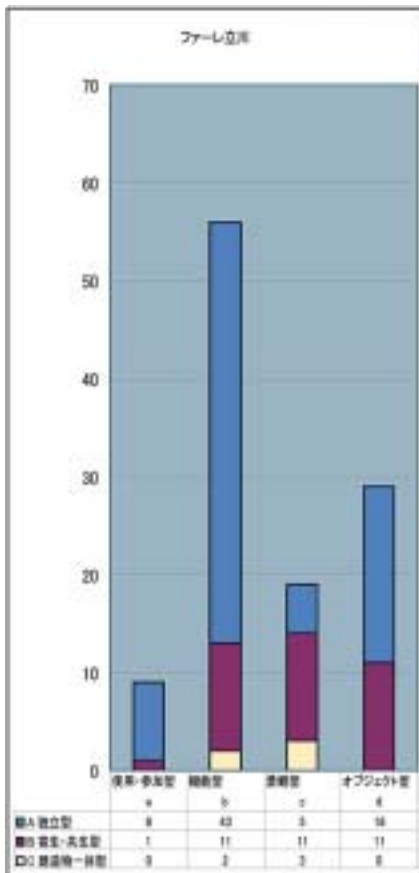
東京国際フォーラム			生活者との距離，関わり方				小 計	割 合
			a	b	c	d		
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型		
設置状態	A	独立型	1	0	2	15	18	66.7
	B	寄生・共生型	0	0	2	7	9	33.3
	C	建造物一体型	0	0	0	0	0	0.0
小 計			1	0	4	22	27	100.0
割 合			3.7	0.0	14.8	81.5	100.0	

表 5

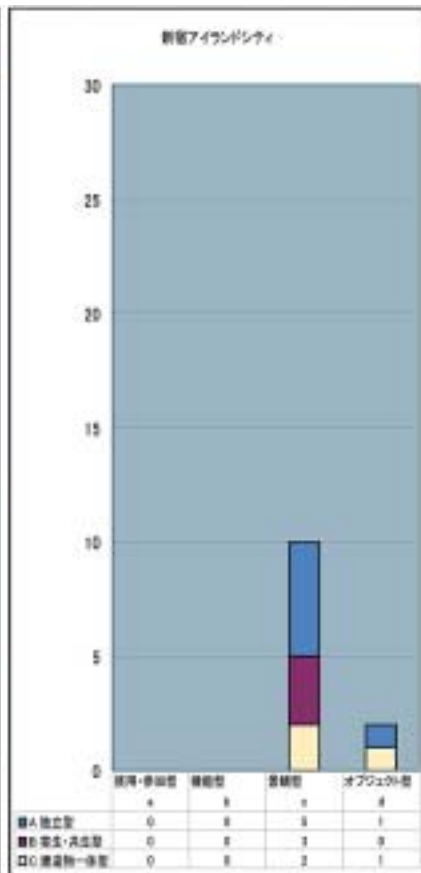
半田市			生活者との距離，関わり方				小 計	割 合
			a	b	c	d		
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型		
設置状態	A	独立型	0	0	2	11	13	86.7
	B	寄生・共生型	0	0	1	0	1	6.7
	C	建造物一体型	1	0	0	0	1	6.7
小 計			1	0	3	11	15	100.0
割 合			6.7	0.0	20.0	73.3	100.0	

表 6

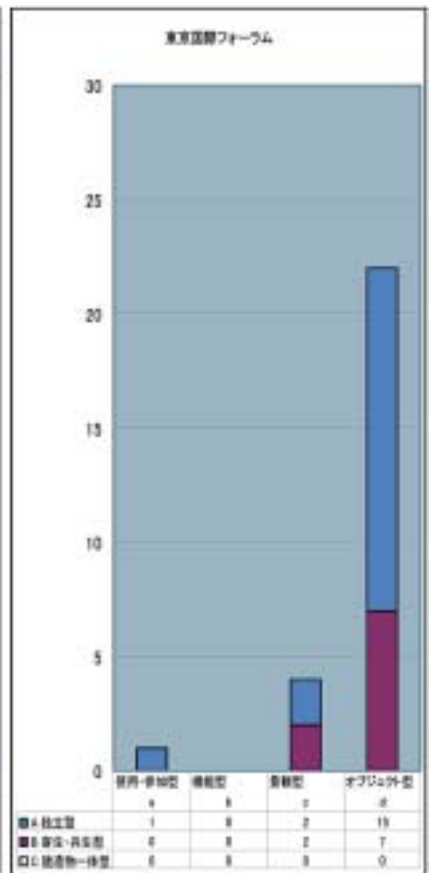
全集計			生活者との距離，関わり方				小 計	割 合
			a	b	c	d		
			使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型		
設置状態	A	独立型	9	43	14	45	111	66.5
	B	寄生・共生型	1	11	17	18	47	28.1
	C	建造物一体型	1	2	5	1	9	5.4
小 計			11	56	36	64	167	100.0
割 合			6.6	33.5	21.6	38.3	100.0	



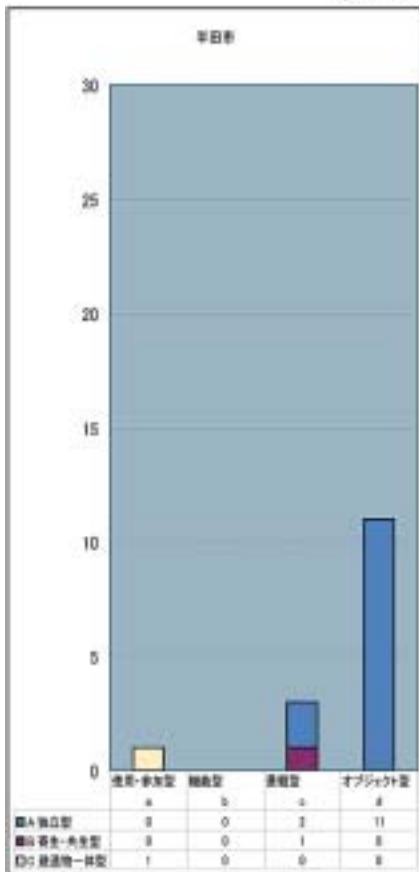
<グラフ1>



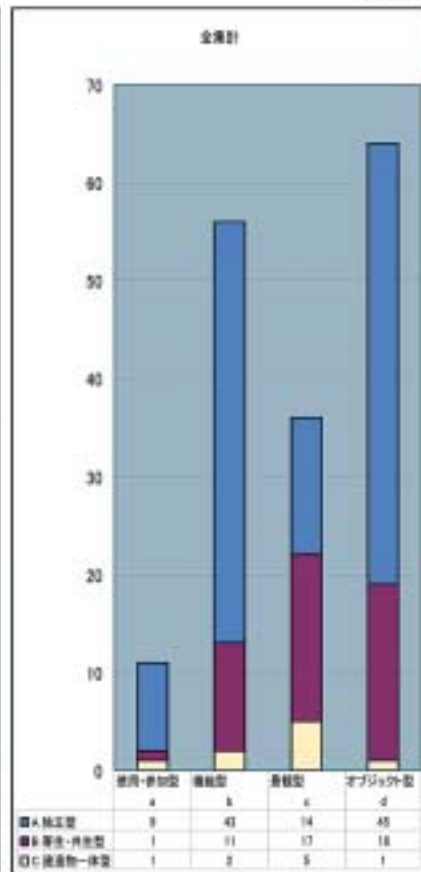
<グラフ2>



<グラフ3>



<グラフ4>



<グラフ5>

表7 各分類におけるパブリックアートの参考例

		生活者との距離，関わり方			
		a	b	c	d
		使用・参加型	機能型	景観型	オブジェクト型
設置状態	A 独立型	 <p>ファーレ立川 (ベンチ)</p>	 <p>ファーレ立川 (車止め)</p>	 <p>新宿アイランドシティ</p>	 <p>ファーレ立川</p>
		 <p>ファーレ立川 (ベンチ)</p>	 <p>ファーレ立川 (車止め)</p>	 <p>東京国際フォーラム</p>	 <p>ファーレ立川</p>
		 <p>ファーレ立川 (照明)</p>	 <p>ファーレ立川</p>	 <p>半田市</p>	 <p>半田市</p>
態	B 寄生・共生型	 <p>ファーレ立川 (ベンチ)</p>	 <p>ファーレ立川 (サイン)</p>	 <p>新宿アイランドシティ</p>	 <p>ファーレ立川</p>
		 <p>半田市 (ベンチ・通路)</p>	 <p>ファーレ立川 (照明・アーケード)</p>	 <p>新宿アイランドシティ</p>	 <p>東京国際フォーラム</p>
設置状態	C 建造物一体型	 <p>半田市 (ベンチ・通路)</p>	 <p>ファーレ立川 (照明・アーケード)</p>	 <p>新宿アイランドシティ</p>	 <p>新宿アイランドシティ</p>